# 国木田独歩『富岡先生』の人物造型および発想の根底

## ——伝記と虚構化の開きをめぐって——

北野昭彦

### I　独歩が明治の現実を見据えた原点

独歩の晩年の病床につき添った真山青果は、

「独歩氏は（中略）長いものでは吉田松陰を主人公にして或る小説を書き度いと言って居た。これはよほど得意のものらしく、松陰を仮りて自分を書くのだと言って居た。[1]」

といい、独歩がそれを書かないうちに病死したのを惜しみ、「思ふても残念なは今一度筆を執らせたかったことだ[2]」と述懐している。

独歩の作品は、大部分が「山林海浜の小民」や都市の「下流細民」を描いた「凡人の伝」で占められているけれど、独歩その人は「小民」の一人として生きた人ではなかった。

独歩は山口県で育ち、維新の志士や明治政府の首脳者たちを多数輩出させた松下村塾の指導者・吉田松陰を尊敬した。しかも内政・外交両面で醜態を演じている薩長中心の「藩閥政府」に不信をいだくにつれて、明治維新の原点に存在する歴史上の人物・吉田松陰をさらに注視し、『幽室文稿』『狂夫之言』『七生説』などを熟読するうちに、独歩は、明治維新で果たされなかった維新本来の革命的理想の原像を、吉田松陰のなかに発見した。

明治二十四年八月、二十一歳の独歩は、かつて松陰に招かれて松下村塾を指導したという七十一歳の富永有隣（ゆうりん）を、山口県田布施の地に訪問した。これが『富岡先生』のモデルだという富永有隣[3]と、独歩との出会いだった。独歩はその訪問記『吉田松陰及び長州先輩に関して』を『国民新聞』に発表した。そして独歩自身も田布施村に波野英学塾をひらき、同郷の青少年に「民権自由は決して空理空想にあらず」（大久保湖邦宛書簡　明24・12・24）と訴え、「自由平等を絶叫して彼等に一片の自由を愛し、平等を熱望する精神を吹込まん」（永谷真熊宛書簡　明24・12・29）とした。

独歩はその後も、「民政」優先の「松陰が所謂至誠……国を愛し民を愛する至誠」（小川今蔵宛書簡　明25・10・15）を信条として、

「我国民をして真理理想に由て立つの国民たらしめ、我国運をして世界人類進歩の魁たらしめ」(欺かざるの記　明26・2・19)るための「国政の大革新」(同26・2・3)を欲し、その拠点を自由党に求め、機関紙『自由』の社員になる。が、「今や薩長は閥を以て腐」るだけでなく、改進党も自由党も「閥を以て腐り、日本政界は日に益々腐朽に進みつゝある」(同26・4・16)と見、「急進党、理想的革新党の起らざる以上は、現今の政党も此のまゝにては遂に吾が敵たるを知」(同26・2・19)るや、「閥を破る者は只だ夫れ革命あるのみ」(同26・4・16)だと考えた。そして『高杉東行詩文集』なども読み、「維新革命の精神を知らん」(同26・3・5)とした。

『自由』社を退き、中学教師として大分県佐伯にいた独歩は、中央の政界が気になり、じりじりしながら、「国民の実力に由て」(大久保湖邦宛書簡　明27・8・16)「藩閥政府の最後」(同27・6・27)と「天下動乱の機大に熟す」(中桐確太郎宛書簡　明27・2・19)こととを切望し、「英雄事を成し徳を立て道を唱へ法を定むるは此時ならん」(同)と、おのれの内に「経世済民の大猛気を充た」(同26・8・29)し、「吾国は断じて革命の火を以て改鋳せざる可からず」(大久保湖邦書簡　明27・3・10)という考えを変えなかった。

明治二十九年、独歩は民友社の少年伝記叢書の号外として『吉田松陰文』を刊行した。これは資料紹介が主で、資料と資料の合間に短文をはさんだだけのものだが、はからずも独歩が松陰に託して自己を語ったと思える個所が少しある。そこで独歩は、松陰の内に、反封建・倒幕のため「局面打破の一番鎗たらんことを希」って「悶々の情を見」せる「革命先生」・「革命家」の像を見出すとともに、「生死を度外に措て唯言ふべきを言ふのみ」という松陰のことばに共感し、そこから後年の独歩の課題になる死生観の問題を導き出して、「生死不朽の問題を工夫したる人」としての松陰像を見出しているのである。

そのころ、独歩はまた「何とか痛切な諷刺小説でも作って今の政治屋を冷罵致し度く候」(中桐確太郎宛書簡　明30・4・16)などと考えたりもし、さらに後、明治三十四年、三十一歳の独歩は星亨と結んで代議士になろうとしたが、星亨が暗殺されたため挫折した。

こうした「単に文芸の士のみの世界でない」[4]独歩の政治的行動や志向を反映した作品は、なぜか独歩文学の中には皆無に等しい。もし吉田松陰のような「革命家」を主人公とする小説の構想が作品化されていたら、独歩の政治的希求や革命的志向を反映した唯一の作品となりえたのではないか、という予測をしてみたくもなろう。真山青果もそれを期待して惜しんだのであろうか。その予測の当否はともかく、青果ならずとも独歩と松陰の関係を知る者は、その幻の作品を惜しまずにいられまい。

だが、松陰は描かれなかったが、松陰の周辺に存在した学者・志士をモデルにして描いた唯一の作品として、『富岡先生』(明35・7)がある。しかし、『富岡先生』には独歩の政治的希求も革命的志向も何ひとつ現われていないではないか、という疑問が

生じるであろう。

実はその点こそ、独歩の有隣観に発して、独歩が有隣を「富岡先生」として虚構化する過程において、独歩の内なる「松陰」を原像とする《革命的理想》と《「藩閥政治」批判》と《「小民」観》という三者の間の、どこに富岡先生を位置づけ、三者それぞれに対してどのように富岡先生をかかわらせているかという、独歩文学の発想の根底を問われる問題があったのである。本稿ではその課題を追究してみたい。

## Ⅱ　富岡先生の《人間像》と人間関係

独歩の描いた「富岡先生」は、いきなり「維新の風雲に会しながらも妙な機から雲梯をすべり落ちて、遂には男爵どころか県知事の椅子一にも有つき得ず、空しく故郷に引込んで老朽ちんとする人物」として登場する。しかも独歩は有隣がモデルだというが、それまでの有隣の人生を貫いてきた志向や行動を全く描いていない。「富岡先生が栄達の座に着くことを妨げた『妙な機』も独歩の主題たるべ十分の可能性をもっている（中略）が、この作品ではこの主題を追求しようとする意図を全く示していない」[5]のである。

その理由の一つは、「有隣が（中略）ついぞ自己の来歴を語ることをしなかった」[6]ため、独歩の有隣理解が松陰の著述で知った野山獄時代と松下村塾時代に局限されていたため、その生涯を貫く志向や行動を中心とする人間像が描けなかった、という点が考えられる。そして今一つは、独歩が主題を「富岡先生の性格悲劇という点」[7]に設定するため、あえて捨象せざるをえなかったという点もあり、おそらくこの両方が不可分に関係していたろう。

では「富岡先生の性格」はどう描かれたか。「同輩は侯伯たり後進は子男たり、自分は田舎の老先生たるを見、且つ思ふ毎に其の性情は益々荒れて来て、其が慣ひ性となったこの先生は、自分の愛娘の縁談のために娘をつれて上京した時でさえ、同輩や後進が「侯爵顔や伯爵顔」をして「慢無礼」だと立腹し、婿にするはずの当の高山（先生の門弟で今は大学出の官吏）をも、「生意気で猪小才で高慢な……小官吏」だと罵倒して、「自分で立てた目的を自分で打壊して帰」るほどに、「煮ても焼ても食へぬ人物」だ、とは高山の弁。

先生が口を極めて痛罵する「江藤三輔」は伊藤博文、「井下聞吉」は井上馨、「狂之助」は山県有朋を、それぞれもじった名である。このあたり、独歩は富岡先生に託して「藩閥政府」の要人への憤りをぶつけているが、先生があまりに「頑固」「片意地」「尊大」「偏執」の人として描かれたため、作者の意図とは別に、「却って富岡先生その人への揶揄かと見られ」[8]るほど喜劇的演出の妙を発揮した結果になっている。先生の「偏執」ぶりは、やはり先生の娘に求婚したがっていた大津（高山同様に先生の門弟で今は官吏）をして、「彼頑固爺の婿になるのは全く御免だ」と言わしめ、「高慢狂気」とまで言わしめた。

では、先生を「偏執」だ「高慢狂気」だという当の高山や大津

は、どう描かれているか。彼らは先生のいう「軽薄」に該当するほど否定的には描かれていない。高山はむしろ、先生の性格批評を的確にできる青年でさえある。

しかし彼らは何かといえば二言目には「江藤侯のお世話で」就職したとか、「井下伯に頼んで十分の手順をする」とかいう「事大的官僚根性」(9)や、権威主義的言辞を吐いて、いたずらに先生を激怒させている。高山は村長宛の手紙に、「先生は相変らず偏執て居られる。……決して先生を冷遇するのではないが先生の方で勝手にさう決定て怒って居られる」と書いた。これは彼の偽らぬ本心であろう。しかし、なるほど彼は「先生を冷遇するのではない」が、彼自身の内にある事大主義・権威主義に自ら気づいていない。だから、それが先生を怒らせているのだということに全く理解が及ばず、先生の怒りを先生の「偏執」のせいだと決めつけて、自らを納得させる以外にないのである。

それに、やはり先生の門弟で今は小学校長の細川は、「大津の方から此頃は私を相手にせんやうです」と、小学校長を蔑視する大津の態度を突いているが、それは大津だけでなく、高山とて恐らく同じであろう。

以上のように独歩は、富岡塾から大学出の「小官吏」に「出世」した登場人物を共通に事大主義的・権威主義的な傾向のある人物として描き、彼らと先生を共に相対化して描いた。そのように両方を相対化しうる視点は、作中の小学校長細川や村長の視点であろう。だから先生の人間像をつかむうえで重要なのは、高山の村長宛の手紙に示された先生の性格解剖だけでなく、今一つ、細川が先生の娘梅子に求婚の意志あることを示した時の先生の言動と、それに対する細川の批判である。

細山は「富岡の塾でも一番出来が可かった」が、「家計の都合で……官費で事が足りる師範学校に入って卒業して小学校教員となった」青年である。その細川の梅子に対する気持ちを知った先生は、「貴公は高が田舎の小学校の校長ぢゃアないか。……高山や長谷川は学士だ、それにさへ乃公は娘を与んのだぞ。身の程を知れ」と細川を罵倒する。そこから細川の「人物よりも人爵の方が先生には有難いのだ」という批判がひき出され、明治政府の元勲に対する先生の「その反逆精神が実は世俗主義の裏返し」(10)であり、先生の世俗的欲望が満たされなかったための憂さ晴らしに過ぎないことが映し出されてくる。これこそ「其経歴が造った富岡先生」の歪められた性格の半面なのである。

しかも、この「経歴が造った富岡先生」の歪められた性格のかげに、歪められない「本来自然の富岡氏」があり、この二者が「老先生の心底には常に……相戦」いつつも、「富岡先生は常に猛烈に常に富岡氏を圧伏するに慣れて居る」ところに、この一篇の主題ともいうべき先生の悲劇性が見られるのである。

独歩は、富岡先生の「経歴」を捨象したのみか、その幻の「経歴」の中には、先生の性格的歪みの根源しか認めていないのである。

## Ⅲ　実在の富永有隣と異なる富岡先生像

独歩は、松陰の内には「維新革命」の本来的理想と「革命家」の本来的原像を認めた。

だが、松陰の周辺にいた一学者・志士であった富永有隣を原像にして「富岡先生」を造るとき、これを松陰の系列にはおかず、むしろ松陰の期待を裏切って「藩閥政府」を生んだ伊藤・山県・井上らと同系列におき、そういう藩閥的野望が満たされずに「脇道へそれ」た「経歴」の運命的影響が、今日の彼の性格的歪みの根源をなしている――という典型像に造り上げてしまったのである。しかも独歩が、

「余の描いた富岡先生の性格は此有隣翁をモデルにしたのである。郷里出身の栄達者に対しての態度などは有隣翁の逸話を基にしたのである。」（余が作品と事実）

と述べているため、従来、有隣像がそのまま富岡先生像だと素朴に信ぜられ、富岡先生が何故そういう典型像に造型されねばならなかったかの必然性の問題が、不問にされてきた。

しかし前記した本稿の中心課題へ迫るには、まずこの点からメスを入れる必要があろう。

第一、有隣が自己をあまり語らぬ人であった上に、独歩は、富岡先生の「郷里出身の栄達者に対しての態度」を描く場合ですら、有隣の「逸話を基にし」なければならぬほど、有隣にあまり近づいていなかったらしい。[11] だから独歩は、有隣の内面を描けるほどには有隣を熟知していなかったにちがいない。だから独歩が「性格は此有隣翁をモデルにした」というその「性格」の意味も、一度の会見の印象と「逸話」を通して感じた彼の《タイプ》か《類型》程度の意味ではなかったか。

それでも富岡先生が内面化された典型像となったかげには、もっと独歩の身近にいた別の人物像を有隣に投影した結果ではないか。それに、たとえ有隣に松陰と通ずる面があったとしても、独歩はそれ以上に「脇道にそれ」た志士の悲劇を思い描かねばならぬという、独歩自身の内的必然性があったのではないか。

ちなみに、有隣を総合的に研究されている玉木俊雄氏の有隣伝[12]などに基づいて、実在の有隣の「経歴」と人物像を検討しておこう。

富永有隣は文政四年（一八二一）周防国に毛利藩士の嫡男として生まれ、十三歳ですでに藩士の前で『大学』を講じた学者である。十四歳で天然痘にかかって顔面に痘痕を生じ、左眼失明。この困苦にもよく学問に励んだ。

ところが、生来の毒舌がたたり、親戚・吏僚のざん言に陥れられて三十二歳の時、見島へ流罪になり、萩の野山獄へ牢替えされた。このころの作に「名を青史に伝へて寧んぞ慊となさんや」の詩文がある。三十四歳の時、同獄に投ぜられた吉田松陰（当時二十五歳）の知遇をえた。松陰は同囚に学問の必要を説き、松陰が『孟子』を講じ、有隣が書道、もと寺子屋師匠の同囚が俳諧を導き、牢役人も加わって学び合い、牢獄変じて学園となった。翌年、松

陰は出獄し、松陰の尽力によって有隣は三十七歳のとき出獄（その間、松陰の要請で『女誡七篇』を和訳した）し、松陰主宰の松下村塾に招かれて師となった。ところが翌年、松陰が幕命でまた下獄するや、有隣は松下村塾から脱去・逃亡（自分にも再入獄の命令がおりるかもしれぬという不安のためともいう）し、松陰や塾生の非難をうけた。翌安政六年（有隣三十九歳）、安政大獄で松陰を失った。

その後、変名で郷里近くに定基塾を開いた（その講本に草した『孫子臆評』は最高峰と評された）が、元治元年（四十四歳）、英米仏蘭連合艦隊が下関を攻撃したとき騎兵隊に加わり、四境戦争、戊辰戦争には騎兵隊その他を率いて各地を転戦し、縦横の知略をめぐらして幕軍に連戦連勝し、倒幕に貢献した。

ところが明治二年（四十九歳）、倒幕に貢献しながら明治政府から解雇されて途方にくれる旧隊士の衷心に動かされた有隣は、明治政府の兵制改革に異見をいだき、脱隊騒動の首謀者の疑いで捕えられたが、土佐へ逃亡した。有隣は明治政府の処遇にもれて「脇道へそれ」たのではない。自らの意志で「脇道へそれ」たのである。もし権勢の座に野望があれば、こういう行動はとらなかっただろう。

以後、有隣は国事犯として追われ、潜伏・逃亡の日々を九年間送るかたわら、書見・思索・執筆を続けた。明治十年（五十七歳）、有隣は西郷隆盛らの西南戦争に呼応し、土佐で同志によびかけて動いたが、翌年、捕えられ、東京の石川島監獄へ六年間投ぜられた。

明治十七年、六十四歳で出獄した有隣は、宮内省に勤める甥の家に寄寓したが、次々と教えを乞う入門者に囲まれた。翌十八年、彼は獄中で諸囚に講じた『大学述義』を忠愛社から刊行した。ところが有隣の反政府的言動を心配した甥は彼に帰郷を勧めた。有隣は明治十九年、六十六歳で山口県熊毛郡城南村に帰郷して定基塾を開き、入門者に囲まれた。明治二十二年、六十九歳で高瀬邸に移って帰来私塾を開き、翌々年、独歩の訪問をうけた。そして明治三十三年十二月二十日、養女一子らに見守られ、八十歳で波乱の生涯をとじた。――

また一説によると、有隣は「次第に、自由民権運動に深いかかわりをもつようになったばかりか、（中略）松陰の思想を継承し、発展させた数少ない人間」[13]だともいわれている。

岡落葉は晩年の有隣を、「富永は（中略）郷党の間には人望がありませんでした」[14]と評しているが、これは松陰が有隣を評して「性質大まかで、悪を憎むこと仇敵の如く、気を使い人を罵る」（富永弥兵衛の免獄を乞う状）といい、「有隣は自らを見ること甚だ高く、群小を見ること仇敵の如し、是に由りて時流の擯斥するところ」（幽室文稿）という状態が晩年まで続いたことを示していよう。が、その反面、「有隣は（中略）多くの門弟達に囲まれ、道を説き、書を講じ、（中略）学問追究の志はかたく、八十の齢を重ねるまで隻眼不自由な視力で著述の筆は一日もやすめなかった」[15]のも間違いない有隣像の側面である。

そういう有隣の志は学問にこそあれ、権勢の座を手が出るほど

ほしがったとも思えない。むしろそこからは「松陰は（中略）自分で政治の実権を画策し、自分でそれを運営して行こうなどとは思ってはいなかった。彼は……後に続くものの善意に信頼した。……同志のために、また主義のために、前進の突破口をつくる役目を引き受け」[16]た松陰像と通ずる有隣像すら浮かんでくるであろう。

ところが、「後に続くもの」が、独歩のいうように、松陰が第一流となした高杉晋作・久坂玄瑞らは維新前にたおれ、「木戸西郷大久保悉く去って、寧ろ第二流政治家の手中に政治の実権が帰したる後」（人物ト其平生）、彼らが奢侈遊楽にふけり、政界を醜い派閥的抗争の場に歪めた。有隣が激怒して「今の侯伯子男を片端から罵倒」（富岡先生）したとしても、それはおのれの失われた野望のためでなく、むしろ二十一歳の独歩に「政治の腐敗を説き、日本を背負って立つ人物のいないこと等、日頃の憂国的な感懐を物語ってその青年の奮起をうながした」[17]のは当然であろう。

独歩は「此翁に梅子なる娘あることなく従って一編に記述せる事件あることなし」（予が作品と事実）と記しているが、有隣に娘があったと仮定しても、彼は間違っても伊藤・山県・井上などの所へ娘をつれて行かなかったであろう。しかし『富岡先生』の虚構は、架空の梅子の婿選び事件だけではなかった。

有隣研究家の玉木俊雄氏は、「独歩は『富岡先生』の冒頭において『維新の風雲に会しながら、妙なはずみから雲梯をすべり落ちて、むなしく故郷に引込んで老いくちんとする人物』の一人に加えているが、かつて野山獄において有隣の詠んだ『名を青史に伝えて寧んぞ慊となさんや』と言う詩を独歩は見逃していたのか、地下の有隣もさぞや苦笑していることであろう」[18]と記しておられるが、有隣の伝記研究の立場からすれば、独歩こそ有隣を矮小化して伝えた張本人だというべきであろう。しかし、これを文学として見れば、独歩は矮小化したなりに有隣を原像として見事な一つの典型像を創造したといえるであろう。

## Ⅳ　富岡先生像を創造せしめた諸要因

しかし、それにしても何ゆえ、「その反逆精神が実は世俗主義の裏返し」であるように矮小化して典型像が描かれねばならなかったのか。そこに三つの要因が考えられよう。

一つは、松陰とその後継者たるべき志士たちの群像に対する独歩の見解・人間評価が関係している。「独歩は有隣とともに、松陰や久坂玄瑞、高杉晋作等維新の功成る前にたおれた先人たちには厚い同情を示し、同時にそれを収穫した現存の成功者たちには痛烈な憤懣を投げかけるというかたちで、（中略）独歩はかれの藩閥批判の最大の拠点を、ほかならぬその藩閥の源流である松陰の周辺それ自体のうちに見出しているのであって、そこにこそ、かれの政治批判の一種の割切れなさと、同時にその注目さるべき独自さとがあった」[19]。

独歩は、松陰が門弟中で「久坂、高杉、を以て第一流と」（吉田松陰及び長州先輩に関して）見ていたことも知っている。が、彼は『吉田松陰文』の中で、「久坂すらも松陰の真率直情を解し兼ね

たると見ゆ。（中略）門下の士未だ此先生の真情愛すべきを知らざるか。（中略）渠は恒に急先鋒を以て自から任じたる也。されど門下の士未だ此先生が性情と真意とを解せず」と、愛弟子に理解されぬ松陰の悲劇性をくり返し強調する。彼は、松陰とその愛弟子とを相対化して見ようとはしない。むしろ松陰を絶対化し、松陰にかわってその心情を代弁し、松陰の立場から、その「第一流」の弟子たちとの間にも一線を画しながら、志士たち群像の動きを追跡・評価する。

そういう独歩が「国民は果して、自由平等の真味を解し居る乎」（水谷真熊宛書簡　明24・12・29）という場合、その「自由」とは人間性の全面的解放による人間的自由であり、「平等」とは全国民的な人間解放によってもたらされる平等を意味した。この「自由」と「平等」との統一的実現こそ「維新革命」の本来的理想であり、その源流を彼は松陰に見出した。「我日本国民が有せねばならぬ道徳、即ち自信、倹約、労働、真面目」（欺かざるの記　明26・2・19）というモラルの発想の根底にも、松陰の原像があったかもしれない。

松陰は独歩にとって「維新革命」の本来的理想を掲げ、行動した「予言者」「革命先生」であり、松陰絶対視の契機もそこにあった。

だが、松陰の後継者中「第一流」の久坂、高杉らは維新の突破口を開いて次々たおれた。

その後、伊藤・山県・井上らに象徴される「第二流政治家の手中に政治の実権が帰した」結果、彼らは維新本来の理想を見失い、政界を醜い派閥的抗争の場に歪めてしまった。

だが、有隣に象徴されるように、維新を生き残った指導者・志士たちの中には、「脇道へそれて」いった者たちもいた。――

以上のように、独歩の内には、松陰を頂点においた志士たちの群像を見分ける四つの類型・類別の基準ができ上がっていた。

このうち、有隣に象徴される維新後に「脇道へそれて」いった志士群像については、独歩は、その松陰絶対化とも相まって、彼らが明治の新体制から疎外される以前は松陰・久坂・高杉らの亡きあとの維新の推進者であったがゆえに、維新後の歪みの根源を等しく彼らの内にも認めようとしたのであろうか。とにかく彼ら「脇道にそれ」た志士たちは、松陰・久坂・高杉らの系列からも外されたのと引きかえのような形で、独歩から「厚い同情を示」される結果となったようである。

しかも、独歩にそのような「厚い同情を示」させた契機は、単に有隣一人との出会いではない。ここにもう一人、有隣よりもはるかに矮小な「長州奇兵隊の残党の一人」との出会いがあった。その人物こそ『まぼろし』後編の「渠」のモデルである松岡信太郎である。[20] この松岡のことを独歩は次のように記している。

「朝、松岡信太郎来る。何者ぞ。長州騎兵隊の残党の一人なり。五十二歳。渠何者ぞ。今朝また来りぬ。あゝ渠何者ぞ。渠は悲惨なる事実の現化なり。われ此の事実の現化を更らに深く知らんことを欲す。」（欺かざるの記　明30・3・25）

この松岡信太郎の「経歴」と、独歩との出会い、相渉のいきさつは、谷林博氏の考証[21]によれば以下のとおりである。

松岡信太郎は弘化三年、周防国熊毛郡田布施村に生まれた。騎兵隊にいたが「役付ではなかった」。明治三年、兵制改革のため解雇されて失業した隊士らが、反乱をおこしたが、鎮圧され、敗れた旧隊士たちは、もと同士だった明治の高官を罵ることによって憂さを晴らしていた。その一人に松岡信太郎がいた。

西南戦争の時、松岡は西郷軍に内応した疑いで愛媛県にて逮捕され、彼の自白で一味は壊滅された。松岡は「主謀者でなく告白したことによって」拘留期間だけ釈放された。

明治十九年から二十一年ごろ、松岡は妻子と東京に住んでいたが、その後、田布施へ帰郷し、子供たちに漢籍を教えて生活したらしい。そして明治二十四年十月、同じ田布施村に波野英学塾を開いた独歩と知己になった。

ところが松岡は翌十一月に上京したが、明治二十六年十月には「全戸失踪と戸籍に記入されている」という。松岡は明治政府の処遇にもれて憂さ晴らしの日々を送るうちに、新しい人生の展望を見失い、「生活も苦しく」なるまでに自滅・零落していった。独歩と東京で再会したのは、さらに四年後の明治三十年で、それ以後の独歩との交渉の有無は、『欺かざるの記』擱筆のため不明である。――

以上のように、松岡が「脇道へそれ」た経路は有隣とも類似している。この類似性が、独歩に「其経歴が造った」性格や運命の人として、両者を同類型として見る視点を与え、さらにこの両者と明治の高官たちとを運命的に対照させる視点を与えたに相違ない。

だが、「門弟に囲まれ、道を説き、書を講じ、学問追究の生涯をおく」った有隣と違って、松岡は『まぼろし』に描かれたように、失った世俗的野望に未練を残し、「言ふに言はれぬ無念」の憂さを、「今を罵り昔を誇」ることで「竊(ひそ)かに快しとして」晴らす日々を送るうちに、未来への展望を見失って自滅し、「野卑」に陥り、「零落」していった。（この姿こそ、有隣より以上に、独歩の描いた富岡先生のなかの「其経歴が造った富岡先生」の半面と、本質を同じくしてはいないか。）

そういう姿で松岡は、六年ぶりに独歩の前に出現する。それも「羞恥」を忍んで、何回か独歩に会いに来た。そうした松岡の内に、独歩は「言ふ可からざる……悲しい痛ましい命運の秘密」（まぼろし）を、「悲惨なる事実の現化(ママ)」をを見た。独歩は「脇道にそれ」た志士群像の悲劇的な末路の象徴を、松岡一個の内に見たのである。それは六年前に、一、二度会ったきり交渉の途絶えた有隣の記憶よりもはるかに、文学的哀感をそそり、満腔の同情をこめて内面的に受けとめられたであろう。

それゆえ明治三十三年十二月の有隣の死報を契機にして、独歩が十一年前の有隣の記憶や「逸話」に頼って「富岡先生」像を造型する時、その中に「脇道へそれ」た志士群像の悲劇的末路を一身に象徴するかのような松岡信太郎像が、意識的と無意識的とを

問わず、投影しないはずはない。この、有隣より矮小で人生の展望も失った松岡信太郎像の投影が、富岡先生像を「反逆精神が実は世俗主義の裏返しであ」るように矮小化させたのと引きかえに、「此の事実の現化を更らに深く知」ろうとした独歩の追求のあとをも反映して、「境遇によって歪められ、形成された性格の矛盾と、その矛盾がもたらす悲劇性を分析する[22]」ところまで深化させていったと考えられる。

さらに、それと相まって、富岡先生の内には「無意識若しくは意識的に人間胸憶、個人感と社会感の戦争あり」(欺かざるの記 明26・7・20)という独歩の切実な自己認識・人間認識が投射され、内面描写を深化させている。「個人感」は、おのれ一個の利害から解放されて他を顧みる広い心・「ヒュマニティーの自然」・「愛と誠と労働」の精神であり、「社会感」は「名利欲」や「野心」のことである[23]。これが富岡先生の内面に投射されて、「個人感」は「本来自然の富岡氏」の「極く世間並の物の能く通暁た」半面であり、「社会感」は「其経歴が造った富岡先生」の世俗主義・権威主義・「頑固」「片意地」「偏執」となって具象化されている。そしてこの両者の相剋の後、先生が「極く世間並の物の能く通暁た老人に為って了った」時、先生の内に「圧服」されていた「ヒュマニティーの自然」が回復する——という内面のドラマが展開されていくのである。

## V 小民と英雄の共通項・共通の敵

以上のようなわけで『富岡先生』の中心は、「其経歴が造った富岡先生」の「圧服」から「本来自然の富岡氏」の回復へ、という内面のドラマに向かい、有隣の内なる反政府的志向のくすぶりを剔出して、そこを拠点にして独歩の政治的希求や革命的志向が噴出する可能性は、完全に封鎖された。だが、この問題は以上で尽きるのではない。もう一つ、富岡先生と「小民」とのかかわり方の問題がある。それは富岡先生の内面のドラマに呼応して、もう一つのモチーフとして展開された梅子の婿選び事件から、細川と梅子の結婚にいたる経緯のなかに表わされている。

独歩は作中の村長に、「此縁は(中略)細川繁の成功に終はるやうになっていたのである」と言わせている。「富岡先生には『東京』が何より禁物なので、東京にゆけば是非、江藤侯井下伯其他故郷の先輩の堂々たる有様を見聞せぬわけにはゆかぬ、富岡先生に取っては是れ則ち不平、頑固、偏屈の源因」である。だから、それに直結する大津や高山と先生の娘が結ばれる限り、「不平、頑固、偏屈」の種は尽きない。大津や高山を退け、「山林海浜の小民」を象徴する細川に娘を配することによってのみ、先生は「本来自然の富岡氏」となって救われるのである。

細川は、同じく「境遇によって」自己の才能を発揚できず、小学校長に甘んじながら、「不平、頑固、偏屈」になることもなく、彼の人生を精一杯生きている。独歩はその後、この細川のような

人物を主人公にして『日の出』を書き、「人は人以上の者になることは出来ない、然し人の能力の全部を尽すべき義務を持て居る。此義務を尽せば則ち英雄である」と主人公大島伸一に叫ばせている。これは独歩の「小民」肯定に基づく「小民」のなかの「英雄」ともいうべき人間像である。

独歩のこうした志向はすでに明治二十四年の、

「大丈夫立て天下に大経倫を行ふ能はずんば潔く山間に農夫となれとは僕が近頃の理想なり。」(大久保湖邦宛書簡　明24・12・24)

という言葉に胚胎している。独歩はまず、

「人生の事業豈野心と功名心のみならんや。」(小川今蔵宛書簡　明25・10・15)

と「野心功名心などの為め……働らく」(同)ことを否定し、「松隣が所謂至誠……国を愛し民を愛する至誠」(同)のため働こうとし、それを明治の「藩閥政府」批判の拠点にした。そして「如何に生く可き乎」について、

「神の前に義とせらるゝ真大人、真英雄は始めより英雄たり大人たるを期したる者に非ず。彼れは寧ろ先づ真の人間とならん事を務めて然る後、神彼に大なる務めを下し賜ふ。」(田村三治宛書簡　明25・9・22)

と「先づ真の人間」を志向する。そして、

「英雄事を為し法を立て徳を建て道を定め光を導くは実に此時なり。(中略)神意若しあるならば吾をして必ず此際大に尽す処あらしめ給ふを信ずる也。」(同27・2・16)

と「吾国民の為めに独立独行に当る覚悟」を述べた後、「如何に生く可き乎」の究極を、

「無名の小民か建国成業の英雄か、神が人間にに教へ給ふ生活の方法は此に過ぎず、虚栄(北野註――「虚栄」とは「野心功名心」のため働くこと)は真理の敵也。」(同)というところへ帰結させている。

では「神」がもし「彼に大なる務めを下し賜」わなかったら、「無名の小民」としてどんな生き方があるか。それは「真の人間」としての生き方、「小民」とつながり、「小民」の中の「英雄」としての生き方、すなわち、

「人の能力の全部を尽すべき義務(中略)を尽せば則ち英雄である。」(日の出)

「英雄とは己れの生命の意味を重んじ、熱血と熱涙とを以て神の前に、此の地上に、同胞の為めに尤も真面目なる生涯を送りたる者を云ふ。」(欺かざるの記　明26・8・22)

という信実を実践する生き方で、細川や『日の出』の大島伸一の人生がまさにそれである。

独歩が松隣の内から「維新革命」本来の原点として剔出した、真の人間性解放による「自由」と、全国民的解放による「平等」との統一的実現の理想は果たされなかった。明治の絶対主義政府は、政界を「日に益々腐朽に進」めていった。その結果、「松陰が所謂至誠……国を愛し民を愛する至誠」によって「大経倫を行ふ」道も閉ざされた。そして、

「天地悠々を思ふて小我消へ、小我滅して哀情起り、哀情起りて平等を感じ、平等を感じて慈愛の念油然として心底より涌き来る。是に於て一種言ふ可からざる謙遜の念生じ来り、（中略）満足と平和を感ず。」（中桐確太郎宛書簡　明27・4・6）

という境地に至らなければ「自由平等」を見出せなくなった。だが、そうした心で、遠く松陰や松下村塾に思いをはせつつ明治の現実を凝視すると、国民的解放から取り残された「小民」たちが至る所にいる。そして彼らと同じく明治の体制から疎外され、「小民」と同じ人生を背負い、「小民」の世界に住むことを余儀なくされながら、国民的解放から取り残された「小民」の子弟を「真理」に向けて啓発し、「人類社会に尽すべき（中略）未来の真運動」（社会と人）へ導く仕事に精一杯生きているのが、細川や『日の出』の大島伸一である。そして「本来自然」の人間性を回復した富岡先生も、その一人となる以外に「真の人間」として生きる道はなかった。

ただ、細川が『日の出』の大島伸一ほど鮮明に描かれていず、また小学校長の彼をとりまく現実が『酒中日記』ほど浮彫りにされていない。そのことが、富岡先生の反政府的志向の具体的内容の欠如とともに、この作品の弱さになっている。

最後に、この作品は「夏の末」から始まり、同じ年の「十一月の末」の富岡先生の死をもって終わっている。「脇道へそれ」た生き残りの志士の最期という、いわば最も叙事的でドラマチックであるはずの題材を扱っているにもかかわらず、それすらも短篇作家・独歩の手にかかると、富岡先生の波乱にみちた人生の全体が死の三か月前に集約されてしまい、「過去と未来を含んだ永遠の現在」[24]を表象して、反叙事的な、「永遠をになった一瞬時の人生断面図」[25]と変わらぬ構図にされてしまったのである。一篇のストーリーが「本来自然の富岡氏」と「其経歴が造った富岡先生」との相剋にかかわる局面に局限され、婿選び事件をはじめとするすべての事件がそこを中心に展開されているのは、そのためである。

（49・9・13）

註(1)(2)　真山青果「我儘な人」（『新潮――国木田独歩追悼号』明治41・7）

(3)　『富岡先生』は長州で有名な富永有隣翁である。」（予が作品と事実）

(4)　吉江喬松「国木田独歩研究」（昭7・新潮社『日本文学講座(13)明治時代下編』所収）

(5)　笹淵友一「国木田独歩と自然主義」（昭45・明治書院『明治大正文学の分析』五五六頁）

(6)　玉木俊雄「富永有隣について」（昭43・田布施地方史研究会発行『田布施地方史』第15号、19頁）

(7)　前掲(5)の五五五頁

(8)　片岡懋「国木田独歩」（昭26・河出書房『日本文学講座Ⅳ』一七〇頁）

(9)　山田博光『日本近代文学大系(10)国木田独歩集』（昭45・角川書店）一八六頁頭注

(10)　(5)の五五七頁。

(11)　独歩が有隣と接しえたのは明治二十四年八月の初会見から、翌二

十五年二月に波野英学塾を閉鎖して柳井へ一家転住するまでの約半年間だが、その間、足しげく有隣を訪ねたという傍証もない。その後、独歩は上京し、以後、有隣を訪ねたことも彼について記述した形跡もない。

(12) 前掲(6)の18頁〜46頁。

(13) 池田諭『松下村塾〈近代日本を創った教育〉』(昭43・広済堂出版) 61〜62頁。

(14) 森銑三「独歩の小説とそのモデル」(『国文学——解釈と鑑賞』昭25・7) これは「岡落葉画伯を訪うて、国木田独歩の小説に就いての話を聴いた。以下はそれを纏めたのである——」とある。

(15) 前掲(6)の19〜20頁

(16) 奈良本辰也『吉田松陰』(昭26・岩波新書) 79頁。

(17) 谷林博『青年時代の国木田独歩』(昭45・柳井市立図書館発行) 77頁——ただし以上の事実は、現存の成功者たちに対する独歩の配慮から、「憚る処あ」って『吉田松陰及び長州先輩に関して』の中には、独歩はわざと記さなかった。

(18) 前掲(6)の20頁。

(19) 猪野謙二「独歩における『政治』——吉田松陰から星亨へ——」(昭41・岩波書店『明治の作家』二〇三頁〜二〇四頁。

(20) この松岡信太郎が『まぼろし』の「渠」のモデルであることは、『まぼろし』後編中に「渠」が「……そら！これを君に呉れる、』と投げだしたのは短刀であった」とあるのに対して独歩の友人で松岡の同郷人でもあった岡落葉が、「松岡信太郎といふ人物があって、私も二三度逢ってゐます。いつかこの人が独歩の家へ来て、生きがたみだといって短刀を置いて行ったことがありました」(前掲(14)と証言しているから、疑う余地はない。

(21) 前掲(17)の64頁〜67頁。

(22) 前掲(5)の五五五頁。

(23) この点については拙著『国木田独歩の文学』(昭49・桜楓社) 第二章を参照されたい。

(24) 工藤好美「ロマンティシズムと抒情詩」(昭42・南雲堂『叙事詩と抒情詩』一二四頁)

(25) 福田恒存「国木田独歩」(昭29・角川文庫』19頁)

(きたの・あきひこ　大津高校教諭)